特集 社会の学としての霊長類学

~~~~~  
原 著  
~~~~~

チンパンジーの「文化」と社会性 ー「知識の伝達メタファー」再考

西江仁徳

京都大学大学院理学研究科・生物科学専攻・動物学系・人類学講座・人類進化論分野

ーイメージを何か手で触れることのできるものと混同してはならない。パイプのイメージは、パイプではないのだ。

Rene Magritte

1. はじめに

日本の霊長類学にとって社会と文化についての問いは、人間社会の起源と進化の研究を支える重要な問いであり続けてきた。私自身の研究関心は、霊長類の社会における「文化」とはどのようなものなのか、ということなのだが、一方で近年の霊長類学における「文化」研究の流れには強い違和感を抱いてきた。この違和感はひとことで言えば「文化が社会的な現象として扱われていない」ということに尽きる。本稿ではこの「違和感」を問題意識の軸としつつ、「社会」という問題群と関連づけながら私なりの「文化」研究を展開してみたい。

2. 現代「文化」霊長類学の問題点

現在の霊長類学で扱われている「文化」へのアプローチは大きく二つに分けられる。

①「変異と残余」としての「文化」

(Whiten *et al.*, 1999; McGrew, 1992/1996, 2004 など)

各地域個体群の行動カタログを作り、このカタログを比較して地域間変異を抽出し、これらの変異のうち生態学的・遺伝的要因で説明できないもの（残余）を「文化」的変異とするアプローチ。

②「個体の能力」としての「文化」

(Tomasello, 1999/2006; Boesch & Tomasello, 1998; Matsuzawa *et al.*, 2001, de Waal, 2001/2002 など)

「文化」を個体内の知識の蓄積と捉え、知識の学習・伝達過程（模倣、教示など）を同定し、そのような学習過程を可能にする個体の認知能力の有無を「文化」の有無の基準とするアプローチ。

これら二つは一見まったく異なるアプローチのように思えるが、私がここで「認知・伝達モデル」とよぶ認識論を共有している。この認識論は実験系・フィールド系を問わず多くの霊長類学者に共有されていると思える。

これにはあとで述べるように私たち自身の文化的背景が色濃く反映されており、チンパンジーという異文化を研究するにあたってこの自文化の相対化は必要不可欠であると考え。そのためには、いわゆる「実証主義自然科学(要素還元的手法)」に狭く自己規定しがちな現代霊長類学の認識論を大幅に拡張する試みが必要になるはずである⁽¹⁾。

2.1. 現代霊長類学のルートメタファーとしての「認知・伝達モデル」

本節では、現代霊長類学のルートメタファーとしての「認知・伝達モデル」についてまとめ、このモデルが想定する学習モデルや学問文化的背景を概観する。

2.1.1. 「認知・伝達モデル」の認識論

まずこのモデルが前提にするのは、客観的な外部環境と、その環境とは切り離された独立した行為主体としての個体、という二元論的(客観主義的)図式である。これは、外部環境からの刺激が個体に知覚され、認知過程を経て表象を形成し、そこからプランを生成して行動として環境(刺激)に対して反応する、という図式となる。この図式は行為の産出における知覚(認知)の先行・制御を強調するという意味で「知覚→行為」モデルであり、「人々はいかに環境に適切に対処できるか」(高木, 2000)という「行為の遂行的側面」(北村, 2007)を強調した認識論であるといえる。

2.1.2. 「認知・伝達」的学習モデル

この「認知・伝達モデル」が想定する学習モデルはおおむね以下のようにまとめられる。個体Aが内部に蓄積している知識表象 x を何らかの方法(行動)で送信し、これを個体Bが受信(知覚)して内部に知識表象 x' を形成(復元)する。そのうえで、表象 x が x' としてどの程度正確に復元されたかが外部の観察者によって評価される。

前項の説明とあわせると、知識表象 x が外

部環境の事象 X とどの程度正確に対応しているか、そしてその表象 x が学習過程によっていかに正確に伝達されるかがそれぞれ評価され、その対応の正確さを可能にする個体の認知能力が「客観的に」評価されることになる。こうした学習観は、学習を独立した個体間の結びつきという問題に還元している。また発達観としては、知識表象の加算的增加と精密化を前提に、未熟・未完成なコドモから成熟・完成したオトナへという単線的な過程を想定している。つまりこのモデルは「個体還元主義」と「個体能力主義」を接合し(以下、個体主義)、さらに外界との対応においては「適応主義」的観点にたっているといえるだろう。

2.1.3 学問文化的背景

こうした認識論には、我々自身の学問文化的背景が深く刻まれている。前項でみたようにこの認識論は個体主義・適応主義的観点にたっているといえるが、これは現代霊長類学におけるグランドセオリーとしての社会生物学が選択・淘汰の単位としての個体概念(あるいは遺伝子概念)を分析の単位として正当化することと相互規定的関係にある(中村, 2003)。また、実証主義自然科学への自己規定によって環境・社会から切り離された独立変数としての個体概念が分析単位として実体化されていることも、この個体主義的認識論の背景となっているように思える(心理学史における同様の傾向は、Danziger, 1997/2005を参照)。

そもそもこうした手段としての認識論は研究課題に応じて多様であってよいはずだが、実際には自然科学的・社会生物学的認識論として自己目的化しているように思える⁽²⁾。またこうした学問文化的背景はそれ自体が自文化中心的性質をもつため、少なくとも我々にとっての「他者としてのサル文化」理解のためには相対化される必要があると思える⁽³⁾。

2.2. 「認知・伝達モデル」への批判

この「認知・伝達モデル」には社会科学諸分野を中心に多くの批判がある。ここでは霊長類学の学問文化相対化および「文化」「知識」「学習」といった基本概念拡張の試みとして、人類学、コミュニケーション論、心理学・認知科学において、この「認知・伝達モデル」がどのように批判されているのかを概観し、代替モデルの可能性を検討する。

2.2.1. 人類学者 Tim Ingold の批判

Boesch & Tomasello (1998) の“Chimpanzee and Human Cultures”という論文に対して、人類学者 Tim Ingold (1998) が厳しい批判を寄せている。10 年ほど前の論文であるが、この批判は残念ながら現在でも有効であり、これまでこの批判にまともに応えた霊長類学者は私の知る限りほとんどいない（ただし、King, 2002; King & Shanker, 2003 などの注目すべき例外もある）。

ここでの Ingold の批判は一貫して「伝達メタファー」に対して向けられている。Ingold の批判する伝達メタファーとは、①「文化」を遺伝以外のメカニズムによって伝達可能な情報の集積と見なすこと、②「文化」研究が情報が世代を越えて伝達されるメカニズムを解明することと見なすこと、という二つの前提からなる。ここで批判されているのは、端的に言えば情報の物象化である。つまり情報を具体的な身体行為から切り離して、個体内部に蓄積され、観察可能な行為によって外部に表出され、個体間をジャンプするように伝達されるような実体化されたモノと考えること。こうした想定を Ingold は「ゼロックス・モデル」と呼び、人類学における「文化」「知識」といった概念の現代的意味との齟齬を強調している。

さらに Ingold は、知識と実践とは切り離すことができないこと、知識とは自由に移動可能な断片ではなく身体化された行為・知覚スキルからなること、文化とは知識の伝達では

なく知識の生成と再生成であることを主張している⁽⁴⁾。

これらの批判は、本稿冒頭に掲げた霊長類の文化研究に対する私の「違和感」とほぼ一致する。Ingold はさらにゼロックス・モデル、伝達メタファーに替わる認識論を提示しているが、この点には3章で触れることにする。

2.2.2. コミュニケーション論

ー「コード・モデル」の破綻

ゼロックス・モデルや伝達メタファーは、コミュニケーション論における「コード・モデル」に相当すると考えられる。コード・モデルとは、情報の発信者が情報を何らかの規則（コード）にしたがってコード化して何らかの回路にのせて発信し、受信者はそれをコードにもとづいて解読し復元する、というコミュニケーションモデルである（水谷, 1997）。

このモデルが依拠する前提は「伝達メタファー」の前提とほぼ完全に重なる。つまり情報（知識）は個体内部に蓄積されるモノとしてあり、これがコード化－伝達－解読という過程を経て他個体へ受け渡され復元される、という前提である。

こうした情報の物象化と共有された規則（コード）を前提とした情報の伝達（復元）モデルへの批判は数多い。最も一般的には、ウィトゲンシュタイン＝クリプキの「規則に従うこと」に関するパラドックス、つまり「規則は行為の仕方を決定できない」という規則モデル一般が直面する問題がある。さらにコード・モデルは規則（コード）が発信者／受信者に共有されていることを前提とするが、これはコミュニケーションについての論点先取であり、「どのようにして規則が共有されるのか」という問題に対して無限後退に陥ることを避けられないという批判も広く展開されている（詳しくは、木村, 1997; 水谷, 1997; 西阪, 1997 などを参照）。

2.2.3. 心理学, 認知科学—「表象主義」の破綻

心理学の対象としての「環境から独立した個体内的に閉じた心」「行為に先立つ動因としての心」といった概念は、心理学自体の研究実践のなかで物理主義的メタファーに依存して構築されてきた歴史的構成概念であることが知られている⁽⁶⁾ (Danziger, 1997/2005; 渡邊, 2000; 河野, 2005)。

認知科学や心理学において、このような状況非依存的な内的過程としての認知・表象というモデルは長く主流の認識論であり続けてきたが、こうした認知主義・表象主義的想定はすでに理論的有効性を失っていることも近年繰り返し指摘されている (佐伯, 1986; 福島, 1993; 石黒, 1998; 渡邊, 2000)。これらの指摘に共通するのは、状況非依存的な心・認知・表象という想定は行為の個体への帰属を説明するメタファーでしかなく、心や認知を再度「状況に埋め込まれた」ものとして捉えなおさなければならない、という問題意識である。

3. 「状況論」的転回—「行為・実践モデル」へ

ここまでみてきた認知・伝達モデル批判に共通する主張は「個体を環境・社会(状況)に埋め込まれたものとして捉える」新たな認識論の必要性である。ここではこうした動きのなかから現れた「状況論的アプローチ」を概説し、さらに本稿の具体的な研究課題へと接続する。

3.1. 「認知・伝達モデル」の脱構築

1980年代後半から、主に心理学, 認知科学, 社会学, 人類学などの分野で、「認知・伝達モデル」に替わる新たなモデルとして注目されてきたのが、「状況論的アプローチ」である (Suchman, 1987/1999; Lave & Wenger, 1991/1993; 高木, 1992; 上野, 1999 など)。こ

の立場は広範な分野のアプローチを含むためひとことでまとめるのは難しいが、「主体と状況を不可分な統一体としてとらえる」という認識を緩やかに共有しているといえる (高木, 1992)。

「状況論」の主張のうち本稿との関連で特に重要なポイントは、①行為についての「プラン・モデル」から「状況的行為モデル」への転回、②知識についての「内的表象モデル」から「身体に埋め込まれた局所的な行為実践モデル」への転回、③学習についての「伝達+表象蓄積モデル」から「実践への参加モデル」への転回、である。

3.1.1. 認識論的転回—行為の産出と知識

まず行為についての「プラン・モデル」だが、これは「認知・伝達モデル」の説明で述べたように、行為に先立つものとしてプランがあり、このプランが行為をコントロールする、という前提に立つ。このプランの生成過程は、外界の情報を知覚し内的に加工して認知することであり、行為は知覚(認知)に従属し、プランによって産出されるものとして捉えられることになる。

このモデルへの状況論の立場からの異議は、「プランは状況的行為のためのリソースであって、どのような強い意味でも、行為のコースを決定するというものではない」(Suchman, 1987/1999) というものである。このことは、実際の行為の流れは連続的でしかも状況は行為の流れに沿って刻々と変化していくため、あらかじめどのようなプランを用意しても行為のコースを決定することは不可能だ、というごく現実的かつ常識的な想定への転回を意味する。ここでは、プランは行為の開始を方向づける程度の行為のリソース、あるいは事後的に行行為者に帰属される行為に関する説明の語彙カテゴリー、ということになる。

次に知識についての「内的表象モデル」だが、知識を環境から独立した内的表象とするこのモデルの図式は、プランが行為を産出すると

いうプラン・モデルの図式と相補的な関係にある。

状況論的に考えると、知識は行為実践そのものと切り離された何かではない。行為は状況を参照し状況を作り出しつつ進み、本質的にその都度のものであるため、知識とは行為に沿って局所的に実現される実践そのもの、ということになる。プランの位置づけと同様に、知識表象の位置づけも、行為の流れを微調整するリソース、あるいは事後的に行為者に帰属される行為を産出する能力に関する説明の語彙カテゴリーへと変更されることになる。

こうした認識論的転回により、行為は知覚にコントロールされたものではなく、むしろ行為は行為可能性の知覚（アフォーダンス）を探索し、知覚は行為と状況との関係の微調整に働くという意味で「行為→知覚」モデル（高木, 2000）をとることになる。これは「人々はどうのような行為を通じて意味づけられ、構造化されたものとして対象世界を知覚するようになるのか」（高木, 2000）という「行為の探索的側面」（北村, 2007）を強調した認識論となる。

3.1.2. 学習モデルの見直し

「認知・伝達モデル」で想定された学習モデルは、独立した個体間で送受信した知識表象を個体内部に蓄積する、というものであった。すでにみたように状況論においては、行為に先行し行為の動因となり行為を決定するものとしてのプラン、身体から分離可能なモノとしての知識表象、といった視点は脱構築されているため、学習についても知識表象の蓄積や伝達といった視点はとらない。

状況論において、学習は「実践コミュニティへの参加」の様態の変化として記述される（Lave & Wenger, 1991/1993; 高木, 1992）。学習とは知識表象の獲得ではなく、行為によって実践へ参加する、その様態の変化こそが学習なのである。ここで注意すべきは、状況やコ

ミュニティはそれ自体で独立に存在するのではなく、行為や認知過程も状況やコミュニティから独立ではなく、それぞれの変化を相互構成的関係のなかに定位させて記述することになるという点である⁽⁶⁾。

このような視点からは学習は常に具体的な行為としての社会的実践への参加というレベルで記述される（高木, 1992）。つまり、学習は個体の内的表象の変化といったことではなく、社会的な出来事の通時的変化として記述されることになる。

こうした「認知・伝達モデル」からの認識論的転回、学習モデルの変更を、ここでは「行為・実践モデル」と呼ぶことにする。私がこの「行為・実践モデル」を導入する理由は主に2つある⁽⁷⁾。ひとつは、我々自身の日常を省みればわかるように、実際の生活は行為を中心におこなわれており、その行為は内的表象、認知、指令中枢といったものに完全にコントロールされているとは考えられず、むしろ不断に生成・変化する状況に働きかけ対応し続けるという営みから生物の生活世界は成り立っていると考えるほうが自然であろうという想定である。もうひとつは、ここまで概観してきたように、「個体」「社会」「文化」「知識」「学習」といった霊長類学でも頻繁に登場する基本概念は他の学問領域において大幅に変更されつつあり、こうした動きに対応することで学問領域間の対話の可能性を確保したいということである。

こうした認識論的転回および基本概念の拡張を試みることで、「文化的行動の獲得過程」といった現代霊長類学的な研究課題も再び明確に「社会」との接点を確保し、より広い展望のもとで他の学問分野も含めて議論を深めていくことができると考える。

3.2. 問題設定—「文化」概念の再定式化

ここまでの現代霊長類学における「文化」研究への違和感を軸とした議論をもとに「文化」概念を再定式化し、以下の分析の基本方

針を示す。

- ①「文化」概念を環境・社会から独立した個体間の知識の伝達としてではなく、根本的に社会的な現象として再構成する。そのために、
- ②「知識」を個体の内的表象ではなく、その都度局所的に実現される行為による関係づけとして捉える。
- ③「行為」を個体に帰属させるのではなく状況に埋め込まれたものとして捉え、行為と状況との相互構成的側面を記述する。
- ④「学習」を内的表象の伝達・蓄積ではなく、局所的な相互行為実践による状況と行為の相互構成的組織化の変化（行為実践の場合の「参加」の様態の変化）として捉える。

以上の方針をもとに、ここからチンパンジーのアリ釣り場面における具体的な相互行為を分析していくのだが、そのさいに導入する方法論（事例の記述にもとづいた相互行為分析）について概略を述べておく。

一般に霊長類学においては、あらかじめ分析概念（たとえば特定の行動パターン）を操作的に定義したうえでその定量的な傾向性を探る、という研究手法をとることが多い（中川, 1992; ただし, 森, 1994; 伊藤, 2003 などの例外もある）。このようなアプローチの有効性を否定するつもりはないが、ここまで論じてきたような認識論的転回をもとに研究を実践していくにあたっては、新たな方法論を導入する必要がある。

本稿の「行為・実践モデル」にもとづく方針では、「知識」はその都度局所的に実現される行為による関係づけのしかたであり、さらに「行為」は常に状況に埋め込まれたものとして記述される。たとえば「毛づくろい」という行動パターンが「親密さ」をあらわす行為となりうるかどうかはその都度の状況、より具体的に言えば、毛づくろいする相手がどうふるまうかに依存しており、実際にやってみるまえに行為者の「プラン」によって（あ

るいは観察者の操作的定義によって）あらかじめ完全に決定することはできない。アリ釣りをしている最中に毛づくろいされれば「邪魔になる」こともありうるし、実際そのように見えることもある。このように特定の行動パターンも状況に依存してその意味は変化しうるし、さらに新たな状況を生み出しうる。このことは、たとえば毛づくろいの行動パターンをあらかじめ定義して（「相手の身体に手や口で接触して体毛をかきわけける行動」など）その傾向性を調べる、という方法論では到達することの難しい現実領域の存在を示していると思える。

このように状況に埋め込まれたものとして行為を扱うにあたっては、個々の事例に着目してその都度の局所的な状況を参照しつつ分析をすすめる必要がある。そして本稿の目的である「文化を社会的な現象として捉えなおす」こととの関連で特に注目すべき「状況」とは「行為の社会的側面」であり、いわゆる「相互行為」の水準に定位して個々の事例を記述し分析することが求められる理由はここにある。

もしもチンパンジーにとって「社会的なこと」がなんらかのリアリティをもっているとしたら、それは彼ら同士の実際のやりとりにおいて必ず現れるだろうし、またそうした実際のやりとり以外に『彼らにとっての社会的なこと』と私たちが呼べる何か⁸⁾が現れる場面はないだろう。彼らにとっての社会的なやり方は、それが「社会的」と呼びうる何かである以上、彼ら自身にとって経験的な問題（何らかのかたちで観察可能な現象）であるはずだ。さらに、彼らにとってどのような事態が実際に観察可能になっているのかは、彼らの互いのふるまい方として（のみ）現れうると考えられる⁸⁾。

チンパンジーにとっての社会的なやり方の知識は、それが私たちにも何らかの意味で社会的と思える何かである限り、少なくともチンパンジーにとって観察可能な何かであると

考えられる。そして本稿で私が理解しようと試みることは、彼らのそうした日常的な実践における社会的なやり方の局所的な組織化の様態、つまり彼らが互いに何をどのようにして観察可能にしておりそれを互いにどのように利用しているのか、ということにほかならない。このような問題設定は、彼ら自身の(ethno-)やり方の知識(methodology)を理解しようとする試みという意味で、エスノメソドロジ的発想に類したものといえるかもしれない(Coulter, 1979/1998; Psathas, 1988/1995; 西阪, 1997; 2001)。また私たち自身にとっての異文化を理解しようとする試みという意味で、人類学的な問題意識にも近いといえるかもしれない(田辺, 2003 など)。しかしこうした優れた先例も人間以外の対象に向けられたものではないため、いずれにせよチンパンジーの社会的なやり方を記述するにあたっては、こうした先行する理論を換骨奪胎したうえで独自の方法論を模索していく必要があることは言うまでもない。その意味で私の以下の試みは現時点では不十分であるかもしれないし、何らかの問題をはらんでいる可能性はある。私が以下で試みた事例の分析は他の可能性に開かれているし、私の分析がすべてであるなどと主張するつもりはない。しかし一方で、私自身のスタンスはここまでの議論で可能な限り明らかにしたつもりであるし、少なくともその範囲では彼らが実際にどのようにしてアリ釣り場を社会的に組織化しているのかについて新たな理解を生み出すことができると考えているし、さらに他の社会的な現象の理解にも転用可能な認識論的・方法論的枠組であると考えている。

4. 対象の概要

以上の方針をもとに、ここからチンパンジーのアリ釣り場の行為実践を記述・分析していく。

対象はタンザニア・マハレ山塊国立公園の

野生チンパンジー M 集団 (56 ~ 60 頭) である(調査地については、中村ほか, 1999 を参照)。調査期間は 2002 年 8 月 ~ 11 月と 2003 年 11 月 ~ 2004 年 9 月の約 14 ヶ月間で、アリ釣りの場面は合計 140 回観察した。

アリ釣りはチンパンジーの文化的行動といわれる(Whiten *et al.*, 1999)。マハレでは 1971 年に西田利貞によって最初に観察されて以来、現在まで世代を越えて実践されている(アリ釣りについての網羅的な記載は、西田, 1981; Nishida & Hiraiwa, 1982 を参照)。

前半の議論で「文化」を社会的な行為実践の文脈に再定式化することを試みたが、以下の分析に関わることとして、アリ釣りが社会的な行為実践であることの概要を示しておく。

マハレ M 集団では、この「道具を使って樹上性のオオアリを釣って食べる」という行動を 3 歳以上のほとんどの個体がおこなう (50 / 60 個体)。またアリ釣り場面の約 7 割で複数個体が参加していることから、複数の個体が入れ替わりつつアリ釣り「場」といえるような時空間的広がりを実現していると考えられる(西江, 未発表資料)。こうした傾向は、アリ釣りがその「場」を構成する相互行為とともないつつ実践されていることを示唆している。

このような社会的な行為実践としてのアリ釣りはどのように実現されているのか、以下にチンパンジーのアリ釣り場面における相互行為分析から詳しく検討する。

5. 事例分析—アリ釣り「場」と行為の相互構成的組織化の様態

私の関心はアリ釣りの学習と発達にあったため、当然のようにアリ釣り場における相互行為に焦点をあてて観察をはじめたのだが、実際に観察すると、アリ釣り場での「はっきりしたやりとり」はあまり見られないという意外な事実気がついた。チンパンジーは普段から毛づくろいやケンカ、遊びや挨拶など

さまざまな相互行為をするのだが、なぜかアリ釣りの場面ではこうした「はっきりしたやりとり」が少ないのだ。

実はこのことはすでに西田（1981）が詳しく記載している。西田は釣り場をめぐる争いについて、「露骨な威嚇によって他人の占有している釣り場を奪うことはまれ」であり「おだやかな方法で他人の釣り場を占拠する」ことが多いことを強調している。西田はこの特徴を「順位による個体間関係の調整」によるものと説明し、劣位者の抑制が働いているからこそ「観察者はあらわな競争を目にしない」と述べている。

しかし同じ文章の中にはこの「順位説」にあてはまらない記述も見られる。第一位オスのカソントが道具を作り、釣り場を離れた際に第二位オス・カジャバラが場所を奪い、戻ってきたカソントは別の場所でアリ釣りを続けたこと、中年メスのワサランバが老オスのカメマンフに対して背後から執拗に肩を引っ張ったのにカメマンフが釣り場を譲ったこと、など劣位者の抑制とは思われない事例も観察されている（Nishida & Hiraiwa, 1982 も参照）。

さらにいえば、劣位者の抑制といった一般的規則の共有が相互行為に先立って成立していると考えすることはコード・モデル批判のところで述べたように正当化できない。つまり、一般的規則の共有を前提にせず、しかもおだやかにやりとりを継続しつつアリ釣り場への複数個体の参加を実現すること、このことがどのように実践されているのか、またそこからチンパンジーのアリ釣りが「文化」であることはどのようなこととして理解できるのか、そこに垣間見える彼らの社会性とはどのようなものであるのかを明らかにする必要がある。

5.1. 「はっきりしないやりとり」の継続 — 「相手の出方次第」という行為実践

西田（1981）が指摘したように、アリ釣り場では「あらわな」やりとりが少ない。しか

しこのことはやりとりが少ないということを保ずしも意味しない。ここではまず「おだやかな」やりとりの継続による場所の交代を見ていく。

まず【事例 1】はオトナメス同士のアリ釣り場所の入れ替わりを記述したものである。

【事例 1】 トツツイー、ゾラ、イコチャ（すべてオトナメス）の交渉：2003 年 12 月 26 日

トツツイーが樹上でアリ釣りを始めた直後にゾラが同じ木にやってきて、トツツイーがアリ釣りをしている巣穴の裏側でアリ釣りを始める。10 分ほどでトツツイーがアリ釣りをやめて去ると、ゾラはすかさずトツツイーの使っていた場所に移ってアリ釣りを続ける。まもなくイコチャが道具をくわえてやってきて同じ木に登り、元々ゾラが使っていた場所でアリ釣りを始める。約 1 分後にイコチャがゾラのそばにくると、ゾラはアリ釣りをやめて木の上方へ去り、空いた場所でイコチャがアリ釣りを続ける。

ここでは 3 頭が入れ替わりながらアリ釣り場を構成している。2 回の交代があるが、いずれも「はっきりした」やりとりは見られなかった。2 回目の交代ではあとからきたイコチャがゾラに接近してゾラがアリ釣りをやめているが、威嚇のような明確なやりとりは見られていない。

こうしたはっきりしないやりとりは記録可能な行動が明確でないため扱いが難しいが、実際にはかなり微妙なやりとりを継続していると思える。

まず、「先客」がアリ釣りをやめるとあとからやってきた個体がすかさずその場所を使うということからは、アリ釣りを続けるのか、やめて釣り場を離れるのかなど、相手の出方をよくうかがっていることがわかる。またあとからきた個体が先客に対して積極的に働きかけないことから、おおむね「面倒を起こさないように」行為を微調整しているといえ

る（この点については以下の【事例2～4】もあわせて参照してほしい）。

次に、もう少し「はっきりした」やりとりが観察された二組の母子の事例を分析する。

【事例2】リンダ・リズ（3歳）母子とアビ・アクア（3歳）母子の交渉：2002年9月17日

アビがアリ釣りしている木にリンダがやってきて別の巣穴でアリ釣りを始める。アビはアクアがフィンパー（泣き声）をあげるとすぐにアリ釣りを中断して抱きに行くが、釣り場に戻るとすぐまたアクアが離れていく、というやりとりを繰り返している。三度目にアビが離れたとき、リンダがアビの使っていた場所に陣取ってアリ釣りを続ける。アビは戻ってくるとリンダの身体を少し引っ張るがリンダは動かず、アビは元々リンダが使っていた場所に移って、そこでアリ釣りしていたリズを押しつけてアリ釣りを再開した。

この事例では、先客のアビに対してリンダは当初別の巣穴でアリ釣りをする、という【事例1】と同様のはっきりしないやりとりが見られる。アビが離れるとリンダがすぐ釣り場を移る、というかたちではっきりしないままやりとりが接続している。

アビは娘のアクアがフィンパーをあげるとその都度アリ釣りを中断して抱きに行くという対処をしている。アビが3度目に釣り場を離れたときにリンダがアビの場所に移ってアリ釣りを始めたが、戻ってきたアビはリンダに対して「抑制の効いた」働きかけを試みている（引っ張ってみる）。このアビの働きかけが「抑制された」ものであることは、少し引っ張っただけですぐ別の場所でアリ釣りを再開したこと、またその際リズを押しつけたことと対照的であることから見てとれる。つまり【事例1】でみた「面倒を起こさないような」やり方がここでも観察可能になっている。

5.2. 「抑制された」「探索的」働きかけ

以上二つの事例からは、アリ釣り場ではおおむね積極的な働きかけがなされていないこと、しかしそれはやりとりの不在を示すものではなく、「相手の出方次第」というはっきりしない相互行為が継続していると考えられた。ただし互いの働きかけはまったくないわけではなく、【事例2】の後半では「抑制された」働きかけがみられている。こうした働きかけについて、以下の二つの事例でさらに詳しく分析する。

次の事例は第一位オスとオトナメスの間のやりとりを記述したものである。第一位オスが先客のメスに対して「抑制の効いた」働きかけをする点に注目してほしい。

【事例3】アロフ（第一位オス）とエフィー（オトナメス）との交渉：2004年3月19日

エフィーが地上1mほどの樹上でアリ釣りをしていると、アロフがやってきてすぐそばに座り、エフィーの胸を右手のナックル部分でゆっくりと繰り返し押す。すると徐々にエフィーがグリマスして、やがて悲鳴をあげてアリ釣りの木の上方へ離れた。アロフは空いた釣り場でアリ釣りを始めた。エフィーはアロフの上方1mでアリ釣りを続けたが、約1分後に去っていった。

この事例は、結果からみれば優位者が劣位者から場所を奪ったというやりとりになるのだが、行為の継続を仔細にみれば第一位オスのアロフからの働きかけは非常に緩慢で「抑制された」ものであったといえる（次の【事例4】と比べてみてほしい）。エフィーの「粘り腰」も特徴的で、もし劣位者の抑制ということであればアロフの接近に対してすんなり場所を明け渡してもよいと思われるのだが、実際にはアロフに繰り返し押されるまでは動こうとしていない。むしろ抑制しているのは優位者であるアロフであり、アリ釣りしている個体への働きかけが抑制的であるという特

徴は【事例1】【事例2】と共通している。

このような抑制的な働きかけは、5.1. でみた相手の出方次第という身構えと対になって、その相手の出方という決定不可能な状況を揺り動かし、次なる相手の出方への対処を選択するリソースを探索するものとして働いていると考えられる。

次に、さらに「はっきりした」やりとりの事例を見てみる。【事例3】で抑制された働きかけをしていた第一位オスのアロフが、次の事例では先客のオトナメスとコドモに対して突撃誇示をして場所をどかせるという働きかけをしている。

【事例4】アロフ（第一位オス）とミヤ（オトナメス）、フラビア（コドモメス）との交渉：
2004年9月18日

地面近くの樹上でミヤとフラビアがアリ釣りしていると、アロフが道具を口にくわえてやってくる。釣り場に近づくとアロフはいきなり突撃誇示をし、ミヤとフラビアは樹上へ避難する。アロフはアリ釣りを始めるが、1分もしないうちに去っていく。すぐにミヤとフラビアは元の場所でアリ釣りを再開。しばらくしてアロフが戻ってきて1分ほどアリ釣りをしてまたすぐ去っていったが、今度はミヤもフラビアもそのままアリ釣りを続けた。

この事例は優位者のアロフが非常にはっきりと場所を奪ったといえる。こうした「露骨な威嚇によって他人の占有している釣り場を奪うことはまれ」（西田 1981）なのだが、より重要なのは【事例3】との対比で、露骨な威嚇をすれば簡単に場所を奪うことができるにも関わらず、【事例3】ではそのような働きかけをしていないということである。つまりアロフの働きかけは一般化された順位関係によって決定されたものではなく状況依存的であり、少なくともアリ釣り場では抑制されたかたちで実践されることもある、ということがわかる。

アリ釣り場での場所をめぐるやりとりが一般化された順位関係によって決定されたものでないことは、先客の対処の仕方にも現れている。ミヤとフラビアは最初のアロフの突撃に対してすぐに逃げたが、一度釣り場を離れたアロフが再び戻ってきたときにはそのままアリ釣りを続けた。つまり「突撃されれば逃げるしかない」が「されなければ逃げなくてよい」という対処をしていることがわかる。ここで見られる対処の仕方も状況依存的であり、劣位者の抑制といった「一般的規則」とは無縁である。このことは相手の出方への対処が規則として一般化されたものではなく、相手からの働きかけへの「直接的な」対処であることを示している。

アリ釣り場と行為の相互構成的組織化の様態を探るという観点から、ここまでみてきたことをまとめておく。

アリ釣り場では互いの働きかけはおおむね抑制的であり、相手の出方次第という身構えをおびつつ相手の働きかけには直接的に対処する、という行為実践のあり方が見えてきた。

まず、相手の出方次第という行為実践は、互いに相手の出方に依存するため、はっきりしない相互行為が継続することになっていると考えられた。またこれは未決定な状態に柔軟に対応する身構えとなっており、相手からの働きかけには直接的に対処することでその都度の関係づけを実現していると考えられた。このことはアリ釣り場が複数の個体が参加しながらもあらわなやりとりが少なく、しかも個体が入れ替わりながら継続するという傾向に現れていると考えられる。

次に、抑制的な働きかけという行為実践は、相手の出方次第という身構えと表裏となっははっきりしない相互行為を形成しており、また直接的な対処と表裏となっはその都度の可能な関係づけの探索と実現をしていると考えられた。このことはアリ釣り場が維持されつつも次第に発散・消滅していくこと、またア

リ釣り場の維持は動的なものであり参加する個体の入れ替わりを含みつつ更新され続けていることに対応すると考えられる。

5.3. 母子の「冗長な」やりとりの継続

ここまで主にオトナ同士の相互行為とアリ釣り場の組織化の様態をみてきた。ここからはアリ釣り場でのやりとりへのコドモの参加を母子間の相互行為から検討する。

母子のやりとりの印象は「だらだらと続く冗長さ」である。次の事例は母子の道具（釣り棒）をめぐる「冗長な」やりとりである。

【事例5】ピンキー・パフィー（2歳）母子の交渉：2002年9月8日

ピンキーがアリ釣りを始めると、パフィーがピンキーの使っている釣り棒に手を伸ばして奪い、すぐ捨てる。直後にもう一度パフィーが釣り棒に手を伸ばすと、ピンキーは手で払いのける。さらにパフィーはピンキーの鼠径部にはさんである道具の材料を引っ張るが、ピンキーは手で押さえて保持する。10分ほどしてパフィーがフィンパーをあげると、ピンキーはアリ釣りを中断してパフィーを抱いて授乳するが、パフィーは抱かれたままピンキーの手にもった釣り棒に手を伸ばし、ピンキーはこれを阻止する。

ここでは母親のピンキーはアリ釣りを、娘のパフィーは母親をそれぞれ志向しているようにみえる。娘の母親への働きかけの積極性はこれまで見てきた抑制された働きかけとは対照的だが、母親は直接的に娘の働きかけに対処し続けているといえる。このやりとりは、特定の解決を目指しているというよりは、互いに目の前の事態に直接働きかけ対処し続けるということが実践されているために「冗長に」みえるのではないかと思える。

最後に、先客の息子とあとからきた母親のやりとりを分析する。

【事例6】シンシア・シーザー（5歳）母子の交渉：2003年11月12日

シーザーがアリ釣りを始めるとすぐシンシアがやってきてシーザーを押しつけてアリ釣りを始める。シーザーは姿勢の安定しない場所でアリ釣りをしていたが、やがてシンシアのそばから離れて行きながらフィンパーをあげる。シンシアは一度は手を伸ばして抱きかかえたが、そのあとシーザーが悲鳴をあげながら転げ落ちるように木から降り、結局シンシアはシーザーを追いかけに行った。

この事例では、先客である息子のシーザーがあとからきた母親のシンシアに押しつけられて場所を奪われている。このようにコドモが場所を奪われるのは【事例2】にあったように母子以外でも見られ、オトナ間であらわな交渉による釣り場の占拠が少ないこととは対照的である。場所を奪われたシーザーは別の場所でアリ釣りをするという直接的な対処しており、相手の出方次第で行為を調整するという特徴はここにも現れている。

また、息子のフィンパーに対して母親は対処を余儀なくされ結局アリ釣りをやめて息子を追いかけに行ったのだが、こうしたコドモのフィンパーへの母親の対応は、【事例2】で母親が娘のフィンパーに対処しているうちに別の個体に場所を奪われたケースや、【事例5】で母親が娘のフィンパーに対処して娘に釣り棒を奪われそうになったケースにも共通してみられ、相手の出方への直接的な対処という特徴が現れているといえる。

以上二つの母子間のやりとりからは、母親は相手からの働きかけへの直接的な対処を含みつつアリ釣りを継続していること、またコドモのアリ釣りは母親（オトナ）の働きかけ（場所を奪われる）への対処を含みつつ継続していることがみてとれる。さらにこのやりとりは特定の解決といった外部の目的へ向けられているわけではなく、目の前の事態（状

況)への互いの働きかけと直接的な対処が対になって実践され続けているために「冗長な」「だらだら続く」印象を受けることになるのだと思える。

このようにみてくると、アリ釣りを身につけることとは相手の出方への対処を身につけることを含んでおり、このことは単に「決まったやり方」を身につけるわけではないことを示している。社会的な行為実践の場としてのアリ釣りとはそれへの参加という側面からアリ釣りの学習についてさらにいえば、アリ釣りを身につけることとは「何かをするようになること」という能動的な側面だけでなく、相手への働きかけを「しなくなる」こと、相手の出方を「待つ」こと、未決定な状態のまま「引き延ばす」こと、といった抑制、受動、保留的な側面への注目が必要であるように思える。

6. まとめと考察ーアリ釣り場の相互行為分析からみたチンパンジーの「文化」と社会性

以上の事例分析をまとめ、アリ釣り場の相互行為実践からみたチンパンジーの「文化」と社会性について考察する。

アリ釣り場がチンパンジーの社会的な行為実践の場として組織化される様態には、相手の出方次第という身構え、相手の出方を探索する抑制された働きかけ、相手からの働きかけへの直接的な対処が、それぞれ相互構成的に働いていることが示された。アリ釣り場が、複数の個体が参加しつつはつきりしたやりとりが少ないままおだやかに入れ替わりながら、繰り返し構成され、維持され、更新され、消滅していくことには、チンパンジーのこうした相互行為のやり方(社会性)が現れていると考えられる。

このように考えると、「アリ釣りはチンパンジーの文化である」といったときに含まれる社会性、相手との関わり方とは、道具を使ってアリを釣ることを学ぶ相手との関わり方というよりは、アリ釣りの実践の場を構成する

行為によって繰り返し関係づけられ対処を迫られる相手との関わり方という性質をおびる。つまり、「アリ釣りが文化である」ということは、特定の表象やプランを身につけるというようなことではなく、その都度局所的なアリ釣り場に繰り返し参加し続けること、そのことによって他者との関係づけを繰り返し実現し続けることであり、そうした行為と場の相互構成のしかたこそが、彼らにとってのアリ釣りのやり方、つまりアリ釣りの「文化」といえる側面になっていると考えられる。

ここで取り出したアリ釣り場を組織化するチンパンジーの相互行為のやり方(相手の出方次第ー探索的働きかけー直接的な対処)は、それぞれ独立の要素ではなく、相互構成的(循環的)な「社会的態度」である。こうした相互行為のやり方を循環として記述することは、要素還元的手法に照らせば分析が不十分ということになるのかもしれないが、むしろ私にはこうした社会的な行為実践のあり方が循環的に記述されるということはその組織化が「自律的」であることを示しているように思える。ここで自律的というのは、初期条件や外部条件によって一義的に決定されず、しかも原因ー結果という線形的な関係に還元することもできないような組織化の様態であり、「そうである必然性はないが、いったんそうなってしまえばあたかも必然であったかのように進行する」ような事態である。この過程はあらかじめ外部に決定的な条件があったわけではなく、いったんある境界を区切りつつ循環をはじめれば「あたりまえのように」進行する。

私にはこの自律的な組織化が描く循環こそが、アリ釣り場を社会的な行為実践の場として境界づけていると思える。そしてその循環が再帰的に繰り返し実現することによって、次第に「文化」と呼ばれるような厚みのある行為実践のやり方として歴史性をおびていき、さらに行為者にとって「あたりまえのやり方」になることによってその循環が繰り返し生成していくことになっていると思える。ここで

見えてくるのは「文化」と社会的なやり方との相互構成的過程である。つまり「アリ釣りがチンパンジーの文化である」ということは、こうした社会的な行為の場が繰り返し実現されることであり、道具使用の技術の獲得といったことはこの社会的な過程の一部に埋め込まれたものとして扱われなければならない。端的に言えば、アリ釣り場での社会的なやり方そのものが彼らの「文化」的な実践のあり方であり、「文化」はそれ自体「社会」に埋め込まれたものとして扱われるほかはないのである。

謝 辞

本研究は、文部科学省科学研究費補助金(#16255007, 代表者: 西田利貞) および、京都大学 21 世紀 COE 補助金 (A14, 代表者: 佐藤矩行) によっておこなわれた。

本稿のもととなった自由集会の企画者である中村美知夫、伊藤詞子、田代靖子の各氏には発表の機会を与えていただいたうえ、草稿に何度も目を通して多くの励ましと有益なコメントをしていただいた。また自由集会での発表後には多くの方々に賛否含めてコメントやご質問をしていただき、本稿の議論を深める糧となった。山極寿一教授はじめ京都大学人類進化論研究室の皆様には、度重なる議論のなかで前向きなコメントや励ましをいただいた。2 名の匿名の査読者の方からは本稿の議論の道筋を明瞭にするための数多くの有益なご指摘をいただいた。以上の方々に心からの感謝を申し上げる。

注

- (1) ここで述べている「実証主義自然科学」とは主に、(i) 現象を下位要素に還元すること、(ii) その下位要素間の因果関係(あるいは対応関係)を定式化すること、の 2 点を指しており、こうした立場の背景には、現実世界(環境)は生物と独立

に生物の「外」に存在している、という素朴二元論的・客観主義的認識論がある。このような認識論的態度を「実証主義自然科学」とまとめてしまうことは過度な単純化であり、私自身の「認識論の多様性を尊重すべき」という主張に矛盾するように思われるかもしれないが、私はこのような自然科学的態度そのものを非難するつもりはないし、むしろそのような「認識論的一貫性」がなければ社会的な営みとしての科学は成立せず、そうした一貫性は自然科学的営為の健全な姿であるとすら考えている。

また、この指摘は私が過度に単純化して論じたというよりは、古くからある議論を敷衍したにすぎない。本稿と関連のある社会的な現象についての議論に限定しても、たとえば社会学においては Winch (1958/1977) が社会理論における自然科学的認識論の限界について詳しく論じているし、比較的最近では今田(1986; 2005) が社会を自己組織的なシステムとして定式化し理論づけるにあたって、実証主義対解釈主義といった二項対立的な近代科学の方法理性を乗り越える新たな方法理性を模索・提起している。また Psathas (1988/1995) はエスノメソドロジーと実証主義社会学を対置させながら、実証主義社会学がまず研究主題を設定してそれにあらかじめ慣習的な「操作的」定義を与えてしまうようなやり方をするこで、社会科学における主題の伝統的定義によってあらかじめ決められたことしか調べることができず、対象となる人々の重要な実践を発見できなくなるという点について批判的に論じている。

また霊長類学においても、今西 (1980) は「科学としての生物学は、しかしながら、こういった〔自然誌の記述から実験を中心にしたものへの〕推移によって、進歩したかもしれないけれども、そのた

めに生物学そのものは、おもしろくない学問になったという一面も、ないではない。」(□内は引用者による補足)と述べているし、伊谷(1985)は日本霊長類学会の設立記念講演の中で「霊長類という対象は…(中略)…必ずしも生物学的かつ還元主義的な方法のみに依存することのない、社会科学としての独自の方法論と理論を構築しうる対象でもある」という問題提起をしている。

こうした指摘は時代錯誤的な過去の議論とは考えられない。最近の霊長類学においても、足立(2003)の「不断に生成されつづける社会を、生成のプロセスに注目して分析する方法を、霊長類学はほとんど用意してこなかった」という指摘や、中村(2003)の「現在、霊長類における社会の研究は、ほとんど社会生物学(行動生態学)に依拠して」おり、「そこでは、個体の個性や集団の歴史性などがその時々社会に与える影響、そして個体には還元しえない社会の創発的特性といったものは、基本的に問題にされない」といった指摘がなされており、このような古くから繰り返されてきた問題提起が霊長類学においては(残念ながら)現在でも有効であることを示していると思える。下記注(2)も参照のこと。

- (2) 本稿後半部で示すように、私はチンパンジーの「文化」への記述的分析を軸とした研究手法の開発や理論的整備を試みているが、こうしたやり方に対して霊長類学者から「科学的でない」と批判を受けたことは直接・間接にこれまで何度もある。たとえば、私が本稿後半部で展開したような分析は、標準的な自然科学的手法にかんがみると「禁欲的でない」(擬人主義的、恣意的である)という批判を複数の方から直接いただいたことがある。上記注(1)でも触れたが、こうした「一貫した批判」が可能であるということ自

体、「標準的な自然科学的態度」というべき規範的態度を如実にあらわしていると思える。念のため繰り返すが、私はそうした規範的態度の表明は自然科学として健全な姿であると考えており、そのような「禁欲主義」が無意味であると主張しているわけではないし、私の分析が「禁欲的でない」という批判も受け容れる用意はある。ただし、「私たちは対象の生きる世界を理解しようとしたとき、どのような基準から『禁欲的である／禁欲的でない』と言えるのか」という(認識論的)問題についての霊長類学内部での議論は私の知る限りほとんどないし、今後議論を深める必要のあることだと思える。注(1)、注(3)も参照のこと。

- (3) 河野(2005)は近代的な心の概念を再検討するなかで、類人猿の認知研究における問いの立て方が常に「人間のような認知能力を類人猿が持っているか」というかたちで設定されておりその逆はないこと、また従来からの知能や言語といった概念自体を拡大しようとする試みがないことを指摘し、そうしたスタンスは「人間と類人猿の知的能力の違いを見出すことを目的として」おり、「はじめから相手を疎外することを目的とした、欺瞞的な同化政策に似て」いる、という意味で「植民地主義的と呼ばれるべき態度」であると批判している。
- (4) このような主張について人類学者のコンセンサスがあるとは思わないが、たとえば田辺(2003)は人々の「実践」を理解する試みのなかで、外在する知とその規則が人間の行為を規定するという考え方を主知主義として排し、「知識は本に書かれたようなものではなく生きた身体に宿って」おり、「私たちは知識を操作しているのではなく知識を生きているのである」という〈実践知〉概念を提起し、本稿の主張とも大幅に重なる議論を展開

している。

- (5) 「文化」や「学習」との関連が深いと思われる「個体の知能」という概念は、主に進化論的生物学と合理的な教育システムを起源として20世紀初頭に現れたこと、またアメリカ陸軍新兵の知能検査を開発・実施したロバート・ヤーキーズをはじめ、この個体主義的な心的概念の拡張と普及には当初から動物を対象とした認知科学者が深く関与してきたことが知られている (Danziger, 1997/2005; 石黒, 1998; サトウ・高砂, 2003; 河野, 2005)。
- (6) 紙幅の都合で詳しく論じることができないが、Lave & Wenger (1991/1993) が導入した状況的学習概念は、もともと「徒弟制」を下敷きにしており、表面上は霊長類学において論じられた“Master-Apprenticeship” (Matsuzawa *et al.*, 2001) や「すし職人」 (de Waal, 2001/2002) との類似があるようにみえるかもしれない。しかし、後二者はいずれも本稿で論じた「認知・伝達モデル」にのっとっており、前者の状況論的認識論とはそもそもの立脚点異なるため、その類似は表面上のことに過ぎないし、少なくとも私には後二者では単にメタファーとして用いられているだけで、実際にサルがやっていることが徒弟制に準ずるものであることが示されているように思えない。私が本稿で状況論的アプローチを導入しているのは主に研究スタンスとしての認識論を転回・拡張するためであり、チンパンジーの文化実践を「徒弟制」になぞらえることができているわけではない。また Strum ほか (1997/2004) では状況論的アプローチが霊長類の認知研究の新たな枠組みとして導入されているが、私のみたところ彼女らの議論は「状況」をあまりに固定的なものとして捉えており、また問題意識も「認知」に偏っていて、私が本稿で試みたような「行為」を中心

に据える認識論的転回は不十分である。

- (7) これは二者択一でどちらが正しいという問題ではない。認識論は多様であってよい、と主張しているだけである。私にとっては対象の包括的理解という目的に照らすと「認知・伝達モデル」の想定はあまりにも狭く、より広い展望のもとで研究を展開するためには別の認識論と方法論が必要になると考えているということである。
- (8) これは「彼らが社会を（あるいは他者を）どのようなものと頭の中で考えているか」という問題とは関係がない。実際に頭の中で何かを考えていてもかまわないが、それが社会的な水準でなんらかのリアリティをもつとすれば、それはいずれにせよ実際の相互行為としてしか現れようがないだろう（詳しくは、西阪, 1997; 2001などを参照）。そのように彼らの「知識」を「彼らの頭の中の何か」と同一視する発想は、本稿前半で指摘した「認知・伝達モデル」にもとづいた「表象主義的な知識」観であり、それ自体私たちの文化的伝統にもとづいた「基本的前提（ルートメタファー）」であることはすでに論じた。私たち自身の生活をかえりみればわかるように、私たちは社会がどのようなものかについて頭の中で完全に知っていなくても（まったく考えていなくても）、実際の生活のなかでは社会的に行為することができる。私がここで理解しようとしているのは、そういう意味での「社会的な行為のやり方の知識」であって、Ryle (1949/1987) のいう「方法知 (knowing how)」,あるいは田辺 (2003) のいう「実践知」の理解が目指されているのである。

引用文献

足立薫 2003: 混群という社会. 西田正規, 北村光二,

- 山極寿一編「人間性の起源と進化」昭和堂、京都、pp. 204-232.
- Boesch C, Tomasello M 1998: Chimpanzee and human cultures. *Curr Anthropol* 39(5): 591-614.
- Coulter J 1979: The Social Construction of Mind: Studies in Ethnomethodology and Linguistic Philosophy. Macmillan, London. (クルター J 1998: 心の社会的構成ーヴィトゲンシュタイン派エスノメソドロジーの視点. 西阪仰訳, 新曜社, 東京.)
- Danziger K 1997: Naming the Mind: How Psychology Found Its Language. Sage Publications, London. (ダンジガー K 2005: 心を名づけることー心理学の社会的構成. 河野哲也訳, 勁草書房, 東京.)
- 福島真人 1993: 解説: 認知という実践ー「状況的学習」への正統的で周辺のなコメントール. レイヴ J, ウェンガー E 著, 佐伯胖訳, 「状況に埋め込まれた学習ー正統的周辺参加」産業図書, 東京, pp. 123-175.
- 今田高俊 1986: 自己組織性ー社会理論の復活. 創文社, 東京.
- 今田高俊 2005: 自己組織性と社会. 東京大学出版会, 東京.
- 今西錦司 1980: 主体性の進化論. 中公新書, 東京.
- Ingold T 1998: Comments. *Curr Anthropol* 39(5): 606-607.
- 石黒広昭 1998: 心理学を实践から遠ざけるもの一個体能力主義の興隆と破綻. 佐伯胖, 宮崎清孝, 佐藤学, 石黒広昭著「心理学と教育実践の間で」東京大学出版会, 東京, pp. 103-156.
- 伊谷純一郎 1985: サル学事始めの頃と今日の課題. 霊長類研究 1: 5-14.
- 伊藤詞子 2003: まとまることのメカニズム. 西田正規, 北村光二, 山極寿一編「人間性の起源と進化」昭和堂, 京都, pp. 233-262.
- King BJ 2002: On patterned interactions and culture in great apes. In: Fox RG, King BJ (eds): *Anthropology Beyond Culture*. Berg, New York, pp. 83-104.
- King BJ, Shanker SG 2003: How can we know the dancer from the dance?: the dynamic nature of African great ape social communication. *Anthropol Theor* 3(1): 5-26.
- 木村大治 1997: 情報・規則性・コミュニケーションーシャノンとバイトソンの対比を手がかりにー. 谷泰編「コミュニケーションの自然誌」新曜社, 東京, pp. 31-60.
- 北村光二 2007: 「世界と直接出会う」という生き方ー「東アフリカ牧畜民」的独自性についての考察. 河合香吏編「生きる場の人類学ー土地と自然の認識・実践・表象過程」京都大学学術出版会, 京都, pp. 25-57.
- 河野哲也 2005: 環境に広がる心ー生態学的哲学の展望. 勁草書房, 東京.
- Lave J, Wenger E 1991: *Situated Learning- Legitimate Peripheral Participation*. Cambridge Univ. Press, Cambridge. (レイヴ J, ウェンガー E 1993: 状況に埋め込まれた学習ー正統的周辺参加. 佐伯胖訳, 産業図書, 東京.)
- Matsuzawa T, Biro D, Humle T, Inoue-Nakamura N, Tonooka R, Yamakoshi G 2001: Emergence of culture in wild chimpanzees: education by master-apprenticeship. In Matsuzawa T (ed): *Primate Origin of Human Cognition and Behavior*. Springer, Tokyo, pp. 557-574.
- McGrew WC 1992: *Chimpanzee Material Culture: Implications for Human Evolution*. Cambridge Univ. Press, Cambridge. (マックグルー WC 1996: 文化の起源をさぐるーチンパンジーの物質文化. 西田利貞監訳, 中山書店, 東京.)
- McGrew WC 2004: *The Cultured Chimpanzees: Reflections on Cultural Primatology*. Cambridge Univ. Press, Cambridge.
- 水谷雅彦 1997: 伝達・対話・会話ーコミュニケーションのメタ自然誌へむけてー. 谷泰編「コミュニケーションの自然誌」新曜社, 東京, pp. 5-30.
- 森明雄 1994: 野生ボノボ (*Pan paniscus*) 群における攻撃行動の意味ー社会変動のストーリー分析ー. 霊長類研究 10: 229-251.
- 中川尚史 1992: オリジナリティーのある研究とは? 霊長類研究 8: 153-157.
- 中村美知夫 2003: 同時に「する」毛づくろいーチンパンジーの相互行為からみる社会と文化. 西田正規, 北村光二, 山極寿一編「人間性の起源と進化」昭和堂, 京都, pp. 264-292.
- 中村美知夫, 伊藤詞子, 坂巻哲也 1999: 調査地紹介: マハレ山塊国立公園 (タンザニア連合共和国). 霊長類研究 15: 93-99.
- 西田利貞 1981: 野生チンパンジー観察記. 中公新書, 東京.
- Nishida T, Hiraiwa M 1982: Natural history of a tool-using behavior by wild chimpanzees in feeding upon wood-boring ants. *J Hum Evol* 11: 73-99.
- 西阪仰 1997: 相互行為分析という視点ー文化と心の社会学的記述. 金子書房, 東京.
- 西阪仰 2001: 心と行為ーエスノメソドロジーの視点. 岩波書店, 東京.
- Psathas G 1988: *Ethnomethodology as a new development in the social sciences*. Lecture presented to the Faculty of Waseda Univ. Tokyo. (サーサス G 1995: 序論 エスノメソドロジーー社会科学における新たな展開. サーサス G ほか著, 北澤裕ほか訳「日常性の解剖学ー知と会話」マルジュ社, 東京, pp. 5-30.)
- Ryle G 1949: *The Concept of Mind*. Huchinson, London. (ライル G 1987: 心の概念. 坂本百大ほか訳, みすず書房, 東京.)

- 佐伯胖 1986: 認知科学の方法. 東京大学出版会, 東京.
- サトウタツヤ, 高砂美樹 2003: 流れを読む心理学史—世界と日本の心理学. 有斐閣, 東京.
- Strum SC, Forster D, Hutchins E 1997: Why Machiavellian intelligence may not be Machiavellian. In Whiten A, Byrne R (eds): *Machiavellian Intelligence II : Extensions and Evaluations*. Cambridge Univ. Press, Cambridge. pp. 50-85. (ストラム SC, フォースター D, ハッチンズ E 2004: なぜ, マキャベリの知性はマキャベリではないか. ホワイトゥン A, バーン R 編, 友永雅己ほか訳「マキャベリの知性と心の理論の進化論 II—新たな展開」ナカニシヤ出版, 京都, pp. 45-80.)
- Suchman LA 1987: *Plans and Situated Actions: The Problem of Human Machine Communication*. Cambridge Univ. Press, Cambridge. (サッチマン LA 1999: プランと状況的行為: 人間—機械コミュニケーションの可能性. 佐伯胖監訳, 産業図書, 東京.)
- 高木光太郎 1992: 「状況論的アプローチ」における学習概念の検討—正統的周辺参加 (Legitimate Peripheral Participation) 概念を中心として. 東京大学教育学部紀要 32: 265-273.
- 高木光太郎 2000: 行為・知覚・文化—状況的認知アプローチにおける文化の実体化について. 心理学評論 43(1): 43-51.
- 田辺繁治 2003: 生き方の人類学—実践とは何か. 講談社現代新書, 東京.
- Tomasello M 1999: *The Cultural Origins of Human Cognition*. Harvard Univ. Press, Cambridge. (トマセロ M 2006: 心とことばの起源を探る. 大堀壽夫ほか訳, 勁草書房, 東京.)
- 上野直樹 1999: 仕事の中での学習—状況論的アプローチ. 東京大学出版会, 東京.
- de Waal F 2001: *The Ape and the Sushi Master: Cultural Reflections by a Primatologist*. Basic Books, New York. (ドゥ・ヴァール F 2002: サルとすし職人—〈文化〉と動物の行動学. 西田利貞ほか訳, 原書房, 東京.)
- 渡邊芳之 2000: メタファーとしての「こころ」—心的概念が意味しているもの. サトウタツヤ, 渡邊芳之, 尾見康博著「心理学論の誕生—心理学のフィールドワーク」北大路書房, 京都, pp. 49-64.
- Whiten A, Goodall J, McGrew WC, Nishida T, Reynolds V, Sugiyama Y, Tutin CEG, Wrangham RW, Boesch C 1999: Cultures in chimpanzees. *Nature* 399: 682-685.
- Winch P 1958: *The Idea of a Social Science and its Relation to Philosophy*. Routledge & Kegan Paul, London. (ウィンチ P 1977: 社会科学の理念—ウィトゲンシュタイン哲学と社会研究. 森川真規雄訳, 新曜社, 東京.)

(Summary)

Chimpanzee Culture and Sociality: Reconsidering ‘The Metaphor of Transmission of Knowledge’.

Hitonaru NISHIE

*Lab. of Human Evolution Studies, Dept. of Zoology, Division of Biological Science,
Graduate School of Science, Kyoto University*

‘The metaphor of transmission’ (cognition-transmission model), which is a root metaphor of contemporary primatology, was reconsidered and deconstructed by referring to other academic domains such as anthropology, communication study, psychology and cognitive science. Instead, I introduced another epistemological standpoint, action-practice model, based on the ‘situated action’ approach, in order to expand the perspective of contemporary ‘cultural primatology’ and to understand the relationship comprehensively between primate culture and sociality.

From this standpoint, I analyzed social interactions along ant-fishing among wild chimpanzees at Mahale, Tanzania. Some situated characters of their social practice, such as attitude depending on others’ actions, moderate exploring proposition to others, and direct reaction to such propositions, were considered to be important to realize such social situation of ant-fishing as a cultural practice of chimpanzees.

Key words: chimpanzee, culture, sociality, interaction

西江仁徳 京都大学大学院理学研究科・生物科学専攻・動物学系・人類学講座・人類進化論分野
〒606-8502 京都市左京区北白川追分町

Hitonaru NISHIE Lab. of Human Evolution Studies, Dept. of Zoology, Division of Biological Science, Graduate School of Science, Kyoto University
Oiwakecho, Kitashirakawa, Sakyo-ku, Kyoto, 606-8502 Japan
e-mail : nishie@jinrui.zool.kyoto-u.ac.jp